

その後の地元紙 神戸新聞の報道から かいま見える弥生時代の淡路島

南淡路でみつかった埋納銅鐸 松帆銅鐸 (弥生時代前期末~中期前半)

南淡路で見つかった最古級の銅鐸 その位置づけが注目されている。この松帆銅鐸の性格や位置づけについて、新たに分かったことなどを含め、地元紙 神戸新聞に引き続き報道されているので、そのまま転記してご紹介。

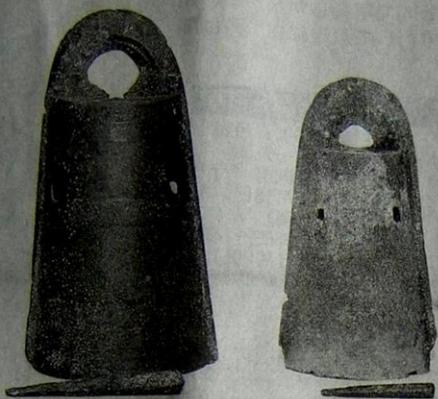
弥生時代 集落から地域集団・国へと大きな集落社会変革・国づくりが進む過程で、弥生時代の末期 邪馬台国連合・初期大和を持ち出す前の時代に有力な勢力が居なかったといわれてきた淡路でも 着々と国づくりが進んできた様子が垣間見える。

2015. 7. 1. by Mutsu Nakanishi

◆ 6月19日 神戸新聞 18面 森岡秀人インタビュー記事より

南あわじで発見の「松帆銅鐸」

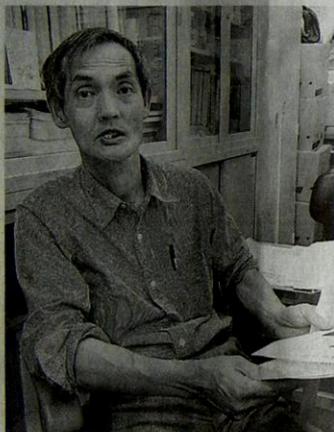
松帆銅鐸のうち1号(菱環鈕2式、左)、2号(外縁付鈕1式)とそれそれの舌(手前)＝南あわじ市(撮影・中西幸大)



銅鐸は鈕(つり手)の形態などの特徴から大きく4型式に分類され、音を鳴らす実用的な形で「聞く銅鐸」から、大型で飾り立てた見る銅鐸へと変化した。集落や墓から離れた山腹などに埋められ、工事中などに偶然見つかることが多い。これまで500個以上の出土例があるが、多数出土は珍しい。

埋納時期 最古の初例か?

「2段階説」さらに細分化を



社会的変動
銅鐸は祭器であり、大きな集落が1個ずつ持つていたと考えられてきた。明治(昭和)にかけて滋賀・大岩山で計24個が出たこと、集落の統合により持ち寄った銅鐸が一括埋納されたこと、神戸出身の故小林行雄・京大名誉教授は解釈した。

もりおか・ひでと 1952年神戸市灘区生まれ。関西大在学中から高松塚古墳などの発掘に参加する。「神戸・阪神間の古代史」(神戸新聞総合出版センター)ほか共著、論文多数。日本考古学協会前理事。古代学研究会代表。芦屋市在住。

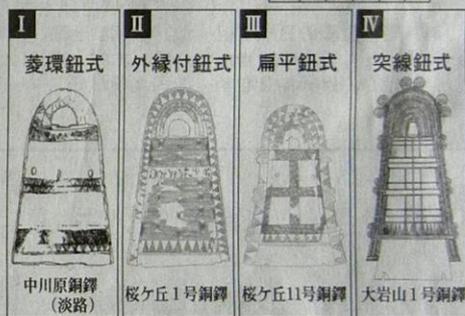
弥生社会の集落社会については、小刻みな変動が分かってきた。「ムラからクニ」(八)という単純な説明は見直される必要がある。銅鐸を社会との関係から考えた研究の進展が期待される。

南あわじ市で見つかった「松帆銅鐸」(7個)。古い型式(弥生時代前期末~中期前半)のみが多数出土する希少な発見が、銅鐸の埋められた時期について再考を迫っている。従来の「2段階埋納説」を進め、松帆銅鐸を第1段階とする「多段階埋納説」を唱える、森岡秀人・芦屋市教育委員会学芸員に聞いた。(まとめ・田中真治)

森岡秀人・芦屋市教委学芸員に聞く

銅鐸の型式と年代観

型式	弥生		前期		中期		後期		計
	1式	2式	1式	2式	1式	2式	1式	2式	
I 菱環鈕式	1	1	6	4	2	19			28
II 外縁付鈕式					2	9			11
III 扁平鈕式					1	2			3
IV 突線鈕式	1式							4	4
	2式							5	5
	3式							12	12
	4式								
	5式								1
									24



(南あわじ市教委、神戸市桜ヶ丘銅鐸・銅文調査報告書、世界考古学大系より)

当初は、古墳時代に移る弥生末の社会変動に伴い、一斉に埋められたとの見方だった。だが、弥生中期末(後期初め)にもあったとする「2段階埋納説」が70年代半ばから支持を集めるようになってきた。

この時期(弥生中期末~後期初め)の近畿地方は、石器から鉄器への移行などによる社会構造の大変換期。平野部の大規模集落が解体、それまでの「聞く銅鐸」が役割を終えたと推測されるから。

96年には島根・加茂岩倉で39個の大発見があり、それまでの大量出土例を踏まえると、古い段階と新しい段階の銅鐸が一緒に出土した荒神谷などがある。弥生後期も2~3段階に分けるべきだろう。



■ 原初的方式
松帆銅鐸は島根・荒神谷(6個)と同様、最古段階の「菱環鈕式」の銅鐸を含むセットという点が重要だ。

松帆銅鐸からは、音を鳴らすための青銅製の舌(振り子)が出てきた。銅鐸の大半は舌を欠いた状態で見つかった。異例。より古い、原初的な埋納方式と見ることができると推測される。

聞く銅鐸 見る銅鐸

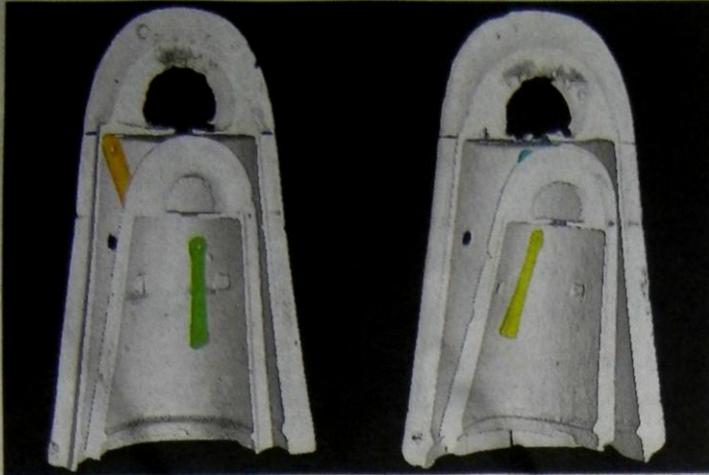
南あわじで4月発見

銅鐸の中に「舌」全国初

CTで判明 使用時のまま埋納か

南あわじ市で出土した弥生時代前期末〜中期前半(紀元前3〜前2世紀)の「松帆銅鐸」7個のうち、大型に小型をはめ込んだ「入れ子」状態にある2組4個から、音を鳴らす振り子「舌」4本が見つかった、と兵庫県教育委員会などが26日、発表した。奈良文化財研究所(奈良市)でのコンピュータ断層撮影(CT)スキャンで判明。舌を銅鐸内に収めた状態が初めて分かった。謎が多い銅鐸の使い方などを解明する極めて貴重な資料になる。

(31面に関連記事)



①コンピュータ断層撮影による銅鐸2組の3次元画像。入れ子の外側と内側の銅鐸内に棒状の舌(彩色部分)がある(奈良文化財研究所提供)
②コンピュータ断層撮影を行った2組の銅鐸(撮影・中西幸大)

「舌をひもで取り付けた使用状態のまま、入れ子にして埋めた可能性が高い」と推測する。舌は青銅製とみられ、打ち鳴らしたことになる摩滅も確認できた。

松帆銅鐸は、今年4月に玉砂利製造販売会社の加工場や砂置き場で発見され、内部に砂が詰まったまま回収した2組4個をCTで調べた。既に発見された舌3本を合わせ、7個全てに舌があったことになる。

新たに見つかった舌は、それぞれセットとなる銅鐸内にあり、同研究所の難波洋三・埋蔵文化財センター長は「舌を外さない埋納が南あわじ周辺の地域色とみられ、地元の勢力

松帆銅鐸は、今年4月に玉砂利製造販売会社の加工場や砂置き場で発見され、内部に砂が詰まったまま回収した2組4個をCTで調べた。既に発見された舌3本を合わせ、7個全てに舌があったことになる。

銅鐸の埋納方法をめぐっては、音を出す祭器の機能を奪うため舌を外す決まりがあったとするのが定説だが、「舌を外さない埋納が南あわじ周辺の地域色とみられ、地元の勢力



舌(ぜつ) 祭器もある。国内の出土例は少なく、青銅製は約10個。下げられた青銅製の棒で、開口部付近の環状突起(突帯)に当たると音を鳴らす。青銅のやじりの転用や石製のもの。今後、砂を取り出し、詳しく調べる。これまで銅鐸は全国で500個以上出土しているが、舌の出土数はその1割にも満たない。うち銅鐸とセットの古い型式段階の「外縁付鈕1式」だった。松帆銅鐸の公開が7月14日〜8月16日、南あわじ市松帆西路の滝川記念美術館「玉青館」で。実物3個とCT画像のパネルを展示する。同市埋蔵文化財調査事務所 ☎0799・42・3849(月〜金曜) (田中真治)

第53回 兵庫工芸展

彼谷 利彬
乾漆花器 割れあけび

(公募の部)大賞

あすまで県民アートギャラリー

.....NEXTに動画

弥生人祭器鳴らし豊作祈願?

「聞く銅鐸」浮かぶ実像

松帆銅鐸 全てに「舌」

南あわじ市の「松帆銅鐸」2組4個のコンピュータ断層撮影(CT)スキャンは、内部に音を鳴らす振り子「舌」を収めた状態を明らかにし、「聞く銅鐸」の実態を科学的に裏付けた。古い銅鐸が多く見つかったいる淡路島。松帆銅鐸がつくられた弥生時代前期末〜中期前半(紀元前3〜前2世紀)、同市内には農耕を営む集落があった。祭器とされる銅鐸を打ち鳴らし、人々は豊作を祈ったのだろうか。

断層撮影1ミリ単位内部再現

2組4個には砂が詰まっていた。そこで、医療用CTより高エネルギーのエクス線で金属内部を透視できるCT装置を活用。4日かけて銅鐸を1ミリ単位で断層撮影し、画像計600枚以上から3次元画像を構築し、内部を再現した。

舌を伴うことが分かった銅鐸。つくられたころ、人々は、

「舌」を揺らす

「舌」を揺らす

銅鐸の鳴らし方(想像図)



野。当時の大規模集落「子曾遺跡」(同市賀集)と想像する関係者が、大量の青銅器を集められたほどの勢力の存在は知られていない。

入れ子状2組「謎の宝庫」

7個全ての舌を持つ入れ子状態であった異例の発見となった銅鐸(5号)とセット「松帆銅鐸」は、弥生人にとりわけ重要な儀礼の器を説明する手がかりが長い。この銅鐸を揺らす多くの手がかりを与えてくれた。CT画像で分かった舌4本はそれぞれ銅鑄型で作られた「兄弟鐸」の内部に接する銅鐸の存在も予想され、奥にあり、舌を揺らすことが鮮明になれば、産地埋めたと推測できる。

ひもは腐食してなくなりますが、銅に接した部分はさびにくく残る可能性があるという。ひもが確認されれば初めて、素材や、舌をどのようにつくっていたかが明らかになる。期待を集める。セットとなる銅鐸と舌の大きさが比例することもはっきりした。その場合、一つだけ

松帆銅鐸	高さ	舌の長さ	備考
1号	26.6cm	13.0cm	
2号	22.4cm	8.0cm	1号内に入れ子
3号	31.5cm	約12.8cm	
4号	約22.6cm	約8.3cm	3号内に入れ子
5号	23.8cm	(仮)12.0cm	破損
6号	31.8cm	約13.2cm	
7号	約21.1cm	約8.0cm	8号内に入れ子

儀礼様式解明へ膨らむ期待

や地域間の交流が判明する可能性もある。弥生土器の装飾部の「ハレ」を水平にする異例の埋納状態だった可能性も浮上した。これまでの出土例から、これは垂直に立てるのが通常とされる。だが今回のCT画像の舌の傾きや銅鐸の位置は、水平に埋まっていたことを示す。不安定な砂地で埋納後に動いたとも考えられ、砂の分析が課題。砂を詰めて埋納したのかどうかも注目される。

特異点の多い松帆銅鐸こそ「埋納の本来の形ではないか」と兵庫県教育委員会文化財課はみる。埋納の時期や意味をめぐり、議論を呼ぶことは間違いない。(田中真治)

名称(伝)は出土地伝承	保管場所
1 中川原銅鐸	隆泉寺(南あわじ市)
2 中の御堂銅鐸(8個出土説あり)	日光寺(南あわじ市) ※現存は1個のみ
3 慶野銅鐸	淡路文化史料館(洲本市)
4 淡路国出土銅鐸(伝)	本興寺(尼崎市)
5 倭文銅鐸	東京国立博物館
6 中条銅鐸	不明
7 淡路川出土銅鐸(伝)	辰馬考古資料館(西宮市)
8 淡路島出土銅鐸(伝)	辰馬考古資料館(西宮市)
9 幡多銅鐸	不明
10 地頭方銅鐸	不明
11 賀集福井銅鐸	不明
12 新田南銅鐸	不明
13 不明	不明
14 不明	不明

淡路島出土銅鐸(南あわじ市教委まとめ)

コンピュータ断層撮影で、内部に舌が収まっているのが確認された2組4個の銅鐸。中に砂が詰まっている。奈良市佐紀町奈良文化財研究所撮影・中西幸十

銅鐸の鳴らし方(想像図)



初期の銅鐸は松帆銅鐸のよう「聞く銅鐸」異性に注目し「埋め」から近畿への文化の鐸一、いわば楽器のたの淡路の地域勢力だった。農耕祭祀力だった可能性が示す遺跡が、見つかるとい